

Title	手織り物からみる女性の日常生活 ウズベキスタン牧畜 地域の事例から (Abstract_要旨)
Author(s)	宗野, ふもと
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2015-11-24
URL	http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k19384
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	宗野ふもと
論文題目	手織り物からみる女性の日常生活 —ウズベキスタン牧畜地域の事例から—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、ウズベキスタンの女性の日常生活について、とりわけ手織り物の生産、売買、使用に着目しながら記述し、彼女らにとっての、働くことの意義を考察するものである。従来の研究では、ソ連解体以後のウズベキスタンにおける市場経済の浸透と、保守的なジェンダー規範の強化がいかに女性の生活に影響を与えているかが問われてきた。その中で、女性が行うべき家事労働や現金獲得活動は負担であると捉えられてきた。本論文は、このような問題設定から出発する記述からはこぼれ落ちてしまいがちな女性たちの日常の様子に着目し、彼女らが、身近な資源を動員し、日常生活をつくりあげていく姿を描くことを目的とする。</p> <p>序論では、ウズベキスタンの女性研究における議論を整理し、市場経済の浸透やジェンダー規範では説明のできない日常生活の中でも、多くの時間と労力を割いている労働に着目する意義が述べられる。そして、労働の多面的な役割を明らかにしていくために、調査地域の自然環境や生活文化に根差した手織り物をめぐる活動に着目することが有効である点を示される。</p> <p>第一章では、ソ連時代の農業の近代化に関する文献資料と世帯調査資料を取り上げ、調査地域の概要と居住する人々の特徴が述べられる。ウズベク人は、都市部や都市近郊農村に居住している集団と、ウズベキスタン北西部ホラズム州周辺に居住する集団、そして、伝統的に半遊牧／遊牧生活を営みソ連時代に定住化した集団から成るといわれている。調査地域の生業や出自認識から、本論文で対象とするのは、三つ目の集団と関わりの深い人々であることが提示される。</p> <p>第二章では、現在生産されている手織り物の種類と、生産の様子を記述する。ここから、手織り物は現在でも日用品として用いられており、かつ、結婚式の際に用意される持参財であることが明らかになる。手織り物生産は、「速く織る方がよい」という認識があり、「誰が何日で手織り物を完成させたか」についての情報が共有されることから、好きな時間に自由に織れる趣味的な活動ではなく、強制力をもった仕事としての側面を持つ活動であるとの考察がなされる。</p> <p>第三章では、娘や息子の結婚に際しての持参財の側面に着目し、結婚と持参財をめぐる人々の発言や行動の記述と、持参財における手織り物の位置づけについての考察がなされる。結婚式では、主催者の経済力と社会的評価がされる。ゆえに、主催者は経済的に無理をしてでも結婚式を豪華に執り行おうとする傾向がみられる。一方、訪問客は、クローゼットや衣料品などの既製品の持参財を見て値段を把握し、両家の経済力や結婚に対しての意気込みを推し量る。手織り物は、換金可能性を有していることから、結婚後の生活を保障する持参財として認識されていることが明らかになる。</p> <p>第四章では、手織り物の換金可能性について、手織り物バザールにおける交渉に注目して分析する。手織り物は、牧畜を主な生業とする地域の生産物である。バザールで仲買人によって買われた手織り物は、農耕を主な生業とする地域で売られる。このことから、カシュカダリヤ州北部では、生業の違いを基盤とし、バザールを結び目とした物流ネットワークが存在していることが確認される。手織り物の換金可能性は、牧畜、農耕という生業の違いによって担保されている。そして、手織り物は、生計維持に貢献していることが明らかになる。</p> <p>第五章では、手織り物に比して「家の仕事」が重視される理由を、社会的アイデン</p>			

ティティの形成の観点から明らかにした。また、「家の仕事」をしながら現金獲得活動をすることを既婚女性たちはいかに捉えているかを、物質的な豊かさとの関わりから考察する。家畜の世話を除いて女性が行う「家の仕事」は、世帯構成員の生活を維持するために不可欠であり、村の女性として生きていくための前提条件であった。また、敷地を囲う外壁がない住居の構造上、「家の仕事」ぶりは世帯外の女性に確認され、遂行者の評価に関わっている。ここから「家の仕事」は、世帯構成員の生活を維持するためだけではなく、遂行者の「村の女性」としての社会的アイデンティティの形成に結びつく活動であることが明らかになった。第二に、家畜の世話は男女の別なく行う仕事であった。調査地域においては、主な収入源である家畜の世話を女性も行うことから、現金獲得活動と「家の仕事」は不可分の活動であることが考えられた。現金獲得活動を行う際には「女性は家にいなければならない」というジェンダー規範は参照されることはなく、生活を豊かにするものとして積極的に捉えられていた。そして、「家の仕事」だけでなく現金獲得活動もする女性は、よく働く女性として高い評価をされていたと論じる。

第六章では、シャラフ一家の手織り物工房での生産活動を記述した。工房での手織り物生産の体制は、シャラフ氏を管理者、織り手を賃金労働者として、織り手たちはできるだけ速く、多くの手織り物を生産することが求められていた。しかし、工房は生産活動だけをするための場ではなく、家族との確執からの息抜きをしたり、友人関係を構築し、その関係を基点に結婚相手を見つけたりする場でもあった。工房における活動の記述を通して、女性たちは日常生活の中で生じる諸問題に対処し、あるべき村の女性でいるための資源—現金、空間、社会関係—を見出していたと論じる。

結論では、手織り物の生産、売買、使用を通して明らかになったことが述べられる。第一に、家畜飼育の副産物である手織り物に着目することで、牧畜を主生業とするウズベク人の生活文化を明らかにされた。第二に、手織り物は状況に応じた用いられ方がされており、「消費の意味領域」（田村 2013）が複数存在する特性を持つものであり、こうした有用性があるがゆえに、生産が維持されていることが明らかになったとされる。第三に、女性たちにとって、「家の仕事」、現金獲得活動、手織り物生産は有機的なつながりを持った活動であること、働くことは、日常生活において、物質的に豊かな生活を実現させるための手段であり、よく働く村の女性を体現することであり、時に、休息の時を提供する多様な役割を果たしていたこと、こうした活動は、日常生活のなかで、身近な資源を状況に応じて使いこなし、暮らしを快適なものにしていこうとする女性たちの指向のもとに行われるものであると論じる。

(論文審査の結果の要旨)

ウズベキスタンを含む中央アジア地域は、ソ連崩壊後に大きな社会経済的变化を経験している。そのなかでも、市場経済化とイスラーム復興が大きな研究課題となってきた。また、市場経済化にともなう生活の不安定化と、イスラーム復興にともなうジェンダー規範の強化によって、女性が二重に周縁化されているか否かということがウズベキスタン研究の重要な問いになっている。

本論文は、このような状況と先行研究における議論をふまえたうえで、現代ウズベキスタンの牧畜地域において、手織り物の生産に着目しつつ、女性の日常生活とそれを支える社会経済関係について、長期の臨地調査をもとに論じるものである。ウズベキスタンでの調査は2年6ヶ月にわたり、牧畜地域のカシュカダリヤ州には1年8ヶ月滞在している。本論文における現代ウズベキスタン牧畜地域社会の記述と分析には、そのような長期調査の着実な成果が見られる。

本論文の意義としては以下の三点が挙げられる。

第一に、現代ウズベキスタンの牧畜地域の女性の日常生活について、長期の参与観察を通して丹念に調査し、分厚く、また生き生きとした民族誌的記述を行なったことである。本論文は当該地域における手織り物生産に用いられる材料、道具、技術、手織り物の種類や特徴についての詳細な記述から出発し、それらが、地域の環境や牧畜、家事労働、結婚、儀礼、貨幣経済等とどのように関わっているかを描くことによって、この地域の生活世界を重層的に描き出すことに成功している。また、これまでのウズベキスタン研究は定住農耕民についてのものが多く、牧畜民に関する詳細な研究はほとんどなかった。この意味においても、本研究は貴重な貢献をなすものである。

第二に、このような分厚い民族誌を通して、ウズベキスタンを含む旧ソ連地域における女性に関する先行研究を批判的に検討したことである。ペレストロイカからソ連解体という出来事は、計画経済から市場経済への移行とそれに伴う経済の混乱を引き起こし、他方では、民族の伝統文化の再評価をもたらした。これによって、ソ連時代の男女平等イデオロギーにかわり、男性優位の保守的なジェンダー・イデオロギーが台頭する。こうした変化は、女性たちに、家庭における母／妻としての役割を果たしつつ、家計を支えるために現金獲得活動をするという二重負担を求めることとなった。このように、女性が二重に周縁化されているという議論に対して、地域社会で影響力をもつ女性イスラーム知識人を取り上げ、草の根レベルでの再イスラーム化は女性によって担われる側面があることを示す事例研究や、あえて家族や親族と距離を取り、近代施設である大学で学びを続ける女子学生の実践を、伝統的な慣習への抵抗として記した研究もされている。本論文は、女性が周縁化されているのか、主体性を発揮しているのか、受動的なのか能動的なのか、という問いに限定されることなく、牧畜地域の女性の生活を記述する。そこで描かれるのは「家の仕事」に追われ、儀礼に参加し、手織り物を生産し売買しながら、家族や親戚、友人たちとおしゃべりや贈答交換をする女性たちである。

「文化的な」都会の生活や都会の女性に憧れつつも、辛い仕事に耐えられる強さや、貞淑さを、自分たち「村の女性」の特徴として誇らしげに挙げる女性たちである。また、携帯電話を通して結婚相手を自分で見つける独身女性の事例等の詳細な検討を通して、「家父長制的イデオロギーの強化」というだけでは捉えきれない、生活世界の変化の有り様を記述することに成功している。本論文はこのように、先行研究における問題設定に対して批判的な距離をとりながら、これまで見過ごされがちであった多面的な現実を描くことによって、ウズベキスタン女性研究への新たな貢献をなすものである。

第三に、経済人類学における「マイナー・サブシステム」と「バザール経済」をめぐる議論への貢献である。マイナー・サブシステムは、集団にとって最重要とされている生業活動に対して、副次的な意味しか与えられていないが、それでも受け継がれて

きている生業活動であるとされる。本論文は手織り物をマイナー・サブシステムとして位置づけることによって、それが持つ生活用品としての価値や交換価値に加えて、その生産を通じて形成される社会関係や情緒的価値についてより明示的かつ多面的に記述することが可能になると論じる。さらに、本論文は、そのように特徴づけられる手織り物がバザールで売買される過程について詳細な記述を行なう。経済人類学において、バザール経済が他の市場経済取引とどのように異なるのか（あるいは異なるのか）という議論が行なわれてきた。本論文では、バザールにおける手織り物の取引において、一見、売り手（生産者）が常に買い手（仲買人）に買い叩かれているように見える現象について、それが双方にとってある種の合理性を持つ所以を、移行期ウズベキスタンにおける手織り物が持つ商品としての性格から解明している。

以上のように本論文は、長期のフィールドワークを通して、移行期ウズベキスタンの牧畜地域に生きる女性たちの生活世界を、詳細かつ多面的に記述・分析したものであり、中央アジア地域の動態、とくにその中での女性の在り方について、新たな理解をもたらす優れた研究である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年7月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。